

分かち合う喜び





福沢清さん（三十五歳）は、関西への出張を終えて、北海道札幌市のマンションに帰つてきました。

四日ぶりに戻ったお父さんとお話するのがうれしくて、裕美ちゃん（八歳・小学二年生）は、



一人で食べた柿の葉寿司

留守の間の出来事を話しながら、お父さんのそばを離れません。雅人くん（五歳・幼稚園児）は、照れくさいのでしよるか、お母さんの百合子さん（三十二歳）の後ろに隠れるようにして、お父さんを見つめています。

久しぶりの一家団欒です。話題は出張先で食べたお弁当のことにまりました。「駅の売店で買った柿の葉寿司、とてもおいしかったよ。奈良県の名産で、しめサバやサケの押し寿司を柿の葉で包んであるんだ。柿の葉の香りも香ばしくて

ね」と福沢さん。

「ぼく、サバよりサケが好きだな」と雅人くん。

「お父さんは、いいなあ。いつも外でおいしいものを食べられて。私も食べたいな」と裕美ちゃん。

「お父さんは、お仕事で遠くへ行っているのよ。そんなこと言わないの!」とたしなめる百合子さんでした。それでも、心の中では「そんなにおいしいなら、お土産みやげに買ってきてくれてもいいのに」と、つい思ってしまうのです。

福沢さんは「家族のことを考えずに、自分のいい思いだけを話してしまった」と少し反省はんせいしました。そして、「ごめんね。今度は必ずみんなの分を買ってくるからね」と約束やくそくするのです。





みんなで食べるとおいしいね

一か月後、福沢さんは再び関西へ出張に出かけました。

出張先での仕事を終えた福沢さんは、駅の売店で柿の葉寿司を二箱ふたばこそうにゆう購入しました。ひと箱に九個人ついていて、家族で分けると一人に四個くらい当たる計算でした。「柿の葉寿司、買ってきたよ！」と言って差し出すと、「うれしいなー、うれしいなー」と裕美ちゃん。その言葉だけでも、買ってきてよかったと思う福沢さんでした。

すでに料理が並んでいる夕食に、柿の葉寿司が加わりました。

すると、百合子さんが思い出したように言いました。「そうだ、お隣の増田ととなりさん、奈良県のご出身とおっしゃっていたわ。ほんの少しだけど、おすそ分けしようかしら。いつも何かと気をかけてくださるし」。「えー、あげちゃうの？ ぼくの分、減へつちやうよ」と雅人くん。「少しだけだと、かつこ悪いよ」と裕美ちゃん。



「〃気は心〃つていうからね。ほんの少しでも、増田さん、喜んでくれると思うよ」

福沢さんの言葉に促されるように、百合子さんは食卓に並べてあった柿の葉寿司を六個取り分けて、増田さんのお宅に届けてきました。

「増田さん、ご主人が出てこられて、本当に喜んでくださったわ」

百合子さんの声は弾んでいますが、子どもたちは少し不満そうです。

「では、いただきますしよ」と福沢さん。

「わー、これが柿の葉の香りなのね。いい香り。おいしい!」と裕美ちゃん。

「みんなで食べるとおいしいね。ぼく、こっちのサバも食べてみようかな」と雅

人くんが言います。

「マーくんずるい！ マーくんの分はもう終わりよ」と裕美

ちゃんは雅人くんをたし

なめながらも、「ママが

お隣にあげちゃうから

いけないんだ……」と

つぶやきました。

「お父さんの分を食べ

ていいよ」と福沢さ

ん。

「裕美にはお母さんが

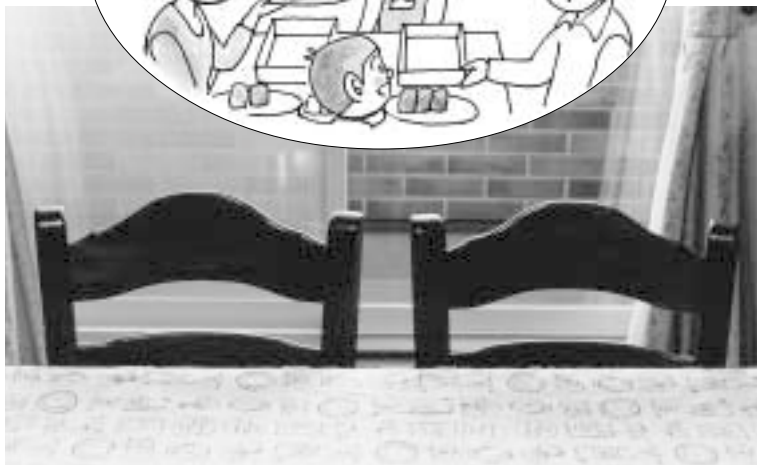
プレゼント」と百合子さ

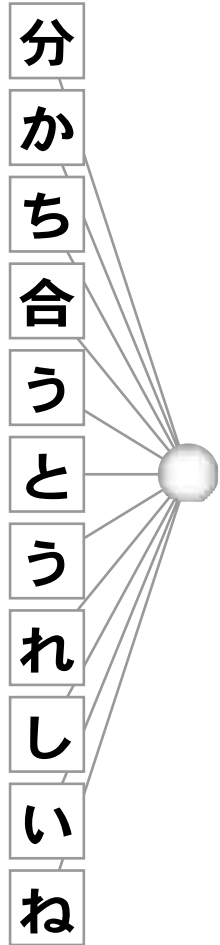
ん。

雅人くんが言うように、「み

んなで食べるとおいしい」と、あらた

めて実感した福沢さん一家でした。





翌朝、裕美ちゃんは玄関のドアを開けて、「行つてきまーす」と元気に学校へ出かけました。エレベーターまでの通路を、増田さんの奥さんが掃除していました。

「裕美ちゃん、昨日いただいた柿の葉寿司、とてもなつかしくて、おいしかったわ。ありがとう」

増田さんは本当にうれしそうに言ってくれました。裕美ちゃんは、お礼を言われてとてもうれしくなり、コックリうなずきました。そしてこう思いました。

“きのうは、私たちの食べる分が減ってしまったと思つたけれど、お礼を言われてとても気持ちよかつた。損えをして、うれしいことがあるんだな”

夜、帰宅した福沢さんは、裕美ちゃんから話を聞き、増田さんにおすそ分けして、本当によかつたと思いました。

柿の葉寿司を増田さんと分け合うことで喜びが広がっていくことを、裕美ちゃんに実感してもらうことができたからです。

一人で始めた ボランティア



百合子さんは
現在、マンショ

ンの前にある公
園の公衆トイレ
を週三回掃除す

ることにしています。もちろんこのトイ
レは、市役所から委託を受けた業者が、
週に数回清掃しているのですが、それだ
けで十分とはいえません。

三か月前のことでした。友だちと公園

で遊んでいた裕美ちゃんが、半べそをか
いて帰ってきました。

「裕美、どうしたの？」と百合子さんは
尋ねました。もじもじして、なかなか答
えない裕美ちゃんでしたが、どうもお漏
らしをしたようです。友だちと遊びに夢
中になつていたのでありますが、急にトイレに
行きたくなつて、公園のトイレに駆けこ
んだ裕美ちゃんでした。

しかし、あまりにも汚れていたので、
ためらつてしまい、自宅に戻る途中、が
まんしきれずに粗相をしたのでした。

これが百合子さんのトイレ掃除ボラン
ティアのきっかけだったのです。子ども
たちが安心して使用できるきれいなトイ
レにしたくて、百合子さんはトイレ掃除
を始めたのでした。

福沢さんと裕美ちゃんを見送り、雅人くんを幼稚園に送った後、自前の掃除用具を両手にトイレ掃除が始まります。

「ただ今清掃中」の看板もダンボールで作りました。洗剤を便器にかけて、亀の子たわしとトイレブラシで便器を磨き、

雑巾で拭き、最後に箒で掃きます。男女両方のトイレ掃除の所要時間

は、おおよそ三十分です。

最初は気恥ずかしさがあったのですが、しばらくするとそれも消えました。

たわしで磨くりズムに合わせるようにして、



「きれいになるわ。うれしいわ」とつぶやく百合子さんです。掃除を終えた後の爽快感は格別でした。何よりも、裕美ちゃんの「公園のトイレ、本当にきれいになったね」という言葉が、いちばんの励みになるのです。

子どもたちが気持ちよく安心して使用できるトイレにすることが動機だったのですが、一か月、二か月と続けるうちに、トイレを汚したままにしておく人や、百合子さんが掃除中なのに、感謝の言葉を述べるどころか、一言も挨拶しないで迷惑そうにトイレを使っていく人に対して、苛立ちや責める気持ちが湧いて



くるのでした。

もう、たわしで磨くりズムに合わせて喜びの気持ちは湧いてきません。湧いてくるのは「どうしてこんなに汚すの。私がかんなに苦労しているのに」という、不平不満の気持ちばかりでした。

ある晩、百合子さんはその不満を福沢さんに話しました。

「そんなにいやなら、やめたらいいじゃない」と福沢さんは言いました。

「なによ、『やめたらいい』だなんて!」
「もともと百合子が自分でやりたくて始めた掃除だろう。それなのに『汚す』とか『挨拶もしない』と、人を責めたりするくらいなら、やらないほうがいいんじゃないか?」と福沢さん。



百合子さんは、「そうね」と答えるものの、どうもすつきりしません。

福沢さんは続けて、こう言いました。

「だいたい、公園のトイレの清掃は市役所が責任を持つべきだよ。清掃が不十分なら、自治会を通じるなどして、正式に陳情したらいいんじゃないのか？ それ

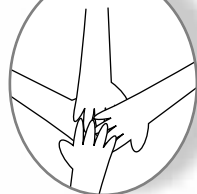
に、百合子がいいことだと思っけていても、ご近所の人の気持ちというものもあるからね」

「そうかしら？」

百合子さんは、まだ納得できないようです。

それでも、今まで、福沢さんがトイレ掃除のボランティアに反対してこなかったのは、百合子さんの「やる気」を認めていたからでした。

みんなで作ったほうが……



翌日は休日でした。朝食後、裕美ちゃんと雅人くんが友だちの所に遊びに行くと、福沢さんが百合子さんに声をかけました。

「トイレ掃除、一緒にしようか」

昨晚、ちよつと百合子さんに冷たく言い過ぎたかなと反省する福沢さんです。ちよつとすねて気乗りのしない百合子さんを追いたてるようにして、前の公園まで降りていきました。

「百合子は、毎日一人でここを掃除しているんだね。ご苦労さん」

床を掃きながら、福沢さんは、しみじみと言いました。二人で行うトイレ掃除はとてもはかどり、あつという間に終わってしまいました。百合子さんには、

最近感じていた苛立ちはありません。

家に帰ってから、百合子さんは言いました。

「私は、最初の気持ちを忘れていたわ。

〃裕美たちが安心して利用できるように〃と掃除していたときは、本当に楽しかったもの」

福沢さんは答えました。

「〃初心忘るべからず〃だね。純粹じゆんずいな気持ちで始めたことでも、しらずしらず、人や社会を責めることになりやすいからね。でも、掃除つて本当に気持ちがいいもんだね。また手伝うよ」

「一緒に苦勞する人がいて、とてもうれしく感じたわ」と百合子さん。

百合子さんは、翌日からまた元気にトイレ掃除を行うようになりました。

それから二週間ほどして、会社から帰宅した福沢さんを待ちかねるように、百合子さんは言いました。

「木村さんの奥さんを誘さそってみようと思うの」

「えっ、何のことだい」と福沢さん。

「公園のトイレ掃除のことよ。このごろ

毎朝の掃除が楽しくてしようがないのよ」と百合子さんが言います。隣の棟むねに住む木村さんは、百合子さんがいちばん親しくしている人です。

「それはいいね。でも、木村さんには迷



公園トイレの
お掃除ボランティア募集！
いつもキレイな公園トイレ
にあるためにご協力ください。

- 毎週月・水・金。
- 朝9時から30分間。
- 連絡は福沢(TEL.〇〇-〇〇〇〇)まで

感じやないかな。都合もあるだろうし、百合子と親しいだけに、その気がないときには断りにくいかもしれないよ」
そこで、二人は相談の結果、掃除仲間を募集することにしました。

自治会長にお願いして、掲示板にポスターを貼りました。

「こんなことしても、反応あるかしら」と半信半疑の百合子さんでしたが、三日ほどして続けざまに電話が入り、結局、四人の仲間が集まりました。

一週間後、公園のトイレの風景です。
百合子さんたちの声が聞こえてきます。
「わが家のトイレより、きれいになったわね」

みんな、明るい声で笑っています。百合子さんは、一人で掃除をしていたときより、みんなで掃除したほうが苦労は減り、喜びは大きくなることを実感しました。百合子さんは、みんなを誘って本当によかったと思いました。

分かち合う喜び

自分が楽しいと思ったこと、心からの喜びと
感じたことをみんなと分かち合いたいと思う
のは自然な心の表れでしょう。

もちろん、自分が本当に喜びと思ったこ
とを他の人に勧める^{すす}ときは慎重^{しんちょう}に行わな
ければなりません。時には、第三者に意
見を聞いてみることも大切でしょう。

他の人と一緒に喜びや苦勞を分かち合
うことによって、より大きな喜びが生ま
れます。また、そのことで、人と人との
つながりが深まったり、家庭や職場や学
校や地域が明るくなる一助^{いちじゆ}となるでし
ょう。

人と人とのつながりが薄^{うす}れている昨今^{さくごん}で
す。「分かち合う」ことの大切さについて、
今いちど考えてみる必要があるのではないで
しょうか。

